

フィジーの夕日。かつてこの海を渡ってきた
"カヌーピープル"と呼ばれる人たちが先住民の先祖だ。

Republic of Fiji

EARTH GALLERY Vol.139 [フィジー共和国]

地球ギャラリー
写真文・村上志緒 (植物学研究者)

未来へ 薬箱を託す



ココヤシを採るために木に登る青年。
食糧のほか、さまざまなフィジアンメディスンの材料となる。



ヒーラーによるボンボ(マッサージ)。
いくつかの薬草を抽出したココナッツオイル、ワリワリサルワキを使う。



マメ科セコウラの木。クリスマスの頃に咲くので
クリスマスツリーフラワーと呼ばれている。



都市部のカヴァマーケット。コショウ科カヴァは、
フィジーの嗜好飲料で日本の酒のような存在。
根を乾かし、砕いて、水で溶いて飲み交わす。

KORO ISLAND
Phone : 331 1126 Mobile : 096 0749



ココヤシから搾ったミルクにハーブを入れて
5時間ほど熱したらワリワリサルワキのでき上がり。



ハーブを乾かすための棚。



ワリワリサルワキに入れるイランイランの花。



潮が引くと海藻を採りに行く。



ラケンバ島を一周できるメインストリート。

着陸間近の飛行機の窓から島々を包む美しい珊瑚礁が見え始め、次第にココヤシの森の緑を湛^たえるフィジーの島々が迫ってくる。2009年から続く私のフィジー行きの目的は薬用植物の調査であり、このときからフィジー人（フィジアン）の友人たちとおつきあいが始まった。330あまりの島々から成るフィジー共和国は、全部の島を足しても日本の四国ほどの国土面積だ。そこに約90万人のフィジアンが暮らしている。人口の約半分は先住民（フィジー語で「Tautai」：イタウケイ）、そして40パーセントは1970年までの約100年間にわたる英国統治時代にサトウキビやタバコ産業などの働き手として入ったインド系のフィジアンである。

この地を最初に踏んだのはカヌーピールと呼ばれる人々だ。カヌーピールとは数千年前の地図もない時代に、独自の航海術で南太平洋をカヌーに乗って渡った人たちのこと。起源は東南アジアと言われている。星を見て、風を感じながら海原を進み、フィジーやサモア、トンガ、タヒチなどの島々に住み着き、最終地点は北半球のハワイ、そして南米大陸の東、イースター島といわれている。あるときフィジアン^の友人に彼のタトゥーのストーリーを説明してもらったことがある。「これが太陽、これが海、これは戦う槍、守らなくてはならない僕たち

の村、そしてこれは“we are Pacific Islanders”という意味さ！」。フィジアンはイタウケイとしての誇り、それぞれの島に対する誇りとともに、太平洋を仲間たちと渡った人々の子孫としての誇りも強く持っている。

行く先にどれだけ長い航海が待っているのかわからぬ旅に出たカヌーピールは、航海中の健康と次世代のために、暮らしに必要な植物50〜60種類をカヌーに積み込んだ。これらの植物はカヌープランツといって、航路に沿って広がり、人々とともにそれぞれの地に根付いていった。その多くは、今もワイ・ヴァカ・ヴィチといわれるフィジーのハーバルメディスン（植物療法）として人々の生活に欠かせないものとなっている。

私が薬用植物調査のフィールドにしているラケンバ島は、首都スバから週に1度の小型機で2時間弱、船で1日半ほどの離島である。そこには大地を素足で踏み、海とつながるたくましい人々の暮らしがある。私のフィジアンメディスン（フィジーの植物療法）の先生であるネーナ（お母さん）が住んでいるヴァカノ村は、今でも電気は一日のうち夕方1時間半ほど通るだけで、喉が乾いたらペットボトルの水ではなくヤシの実から果汁を飲み、夕食のお魚はお父さんが海に獲りに行き、ヒーラー（治療家）にマッサージをしてもらったらタロイモ4本で

お礼する生活が成り立っている場所だ。村での暮らしは、電気に照らされるより太陽の光を浴びること、家の隙間から入る風が連れてくる花の香りを喜ぶことが健やかな幸せだと教えてくれる。

ハーバルメディスンの文化は、受け継ぐことと新しく産むことの二つの要素で成り立っている。フィジーでは母から子へ、大人から子どもへと伝承され、体温が伝わり息遣いを感じるようなつながりを持つ彼らの生活そのものが反映されている。太陽のような友人たちが同じ地球の上で植物の力と人間の知恵で編み上げられたハーバリズム（ハーブ文化）を継いでいる姿は、私たち人類にとって根本的に大切なことを教えてくれている。

そんなフィジーも変化の時を迎えている。首都にはカフェやショッピングモールができて、島の暮らしにもスマホやインターネットが入り込み、電気やお金が必要な時代に移りつつある。それを目の当たりにしながらも、豊かな時間の使い方が続いて、フィジーの未来を築く若者や子どもたちが太陽のような笑顔を持ち続けてくれることを願う。

村上志緒（むらかみしお）

植物療法研究家、株式会社トラボ代表、薬学博士、理学修士。植物療法学（民俗薬草文化、作用機序、特に向精神作用）を研究。日本、ネイティブアメリカン、そして南太平洋フィジーのハーブが研究テーマ。著書に『日本のハーブ事典』、『日本のメディカルハーブ事典』（ともに東京堂出版）など。トラボ <https://www.tolab.com>



左：ココヤシの実を削るネーナ。右：クワ科マシの樹皮で作るタバ布に模様を染める。大人がハーブを扱う様子を見て子どもたちは育つ。